

## 編 集 後 記

研究報告の最終号をお読みいただき、誠にありがとうございます。

本誌は、主として理工系の論文を収録する媒体として、半世紀以上に渡り発行されてきました。近年、査読付き学術誌への論文投稿が広まるなか、本誌への投稿数は減少傾向にあったところ、本誌はその役割を終え、この度廃刊することとなりました。読者の皆様、そして、これまで論文を投稿して下さった皆様に、感謝申し上げます。そして、新しい形での本学の研究成果の情報発信が成就することを祈念いたします。 (貝塚 勉)

引用索引の創始者であり Impact Factor を世に広めたユージーン ガーフィールド博士は IF を個々の教員評価に利用すべきでないと注意喚起している。子供のサッカーのようにみんなでボールを追いかけ回すような分野には有利であろうが、様々な研究対象を取り扱う学術誌では IF は上がるはずもない。しかし、現状では人事評価で IF は重要視されており、皆そのような学術誌にしか投稿できない状況となった。研究報告もその煽りを受け、ついに廃刊となった。万事が IF 重視であることから多様性は失われ、本来、自由であるはずのアカデミックなギョーカイは遥か昔の幻想となってしまった。

カッティングエッジは文字通りその先には道がない。

踏み出せばその一足が道となり その一足が道となる

しかし、もう誰も踏み出せない。

研究報告の廃刊がネガティブなものではなく、面白い論文の新たな受け皿を創出するための発展的なプロセスであることを願っている。 (桑折 仁)

『研究報告』は第 131 号を以って最終号となり、新たな『大学紀要 (研究紀要)』に変遷していくこととなりますが、学外に多様な研究成果発表の機会が増えていること、Scopus のような世界規模の学術ジャーナルの検索データベースに登録される研究論文がより重視される傾向にあることなどから、止むを得ない一面もあると思います。将来の『大学紀要』に期待される役割としては、「工学院大学の研究力を社会に PR するツールにする」ことが挙げられています。このような役割を担う『大学紀要』の活性化を目指す場合、定期的な掲載を期待できるものを取り扱うことも重要ではないかと思います。例えば、ISAT と連携して表彰を受けた論文の解説記事や各学部・学科に対して依頼論文の執筆をお願いすることなどが考えられます。新たな『大学紀要』は、本学の広報活動にも関わるため、高校生に訴えるようなテーマを扱ってもよいと思います。改めて、将来の『大学紀要』に期待します。

(斎藤 秀俊)

残念ながら本号をもって研究報告は廃刊となります。私は奇しくも最後の編集委員長を務めさせて頂きました。本報告への投稿数は年々減少していましたが、その背景には理工学分野では大半の学会で学生を含む研究発表の場が増えていることがあります。一方、本学では研究・教育活動は非常に活発であり、廃刊の議論と同時に、別な形での成果の発信を対外的に行うことも検討してきました。本報告の廃刊は単なる終わりではなく、未来に向けた新しい門出への機会になると考えています。 (久田 嘉章)

編集委員の一員として長い歴史の最後を担当することとなりましたが、歴代編集委員の先生方が整備して下さいだった規定・執筆要領と、事務局の方々のご尽力のお陰で、最終号 131 号も無事に発行を迎えられました。工学院大学の紀要は転換期となりますが、今後の学内紀要の価値向上へ現委員として少しでも貢献できたらと思っております。 (福田 一帆)

研究報告が最終号になり、来年度から研究論叢との統合が検討されている。第 1 号は 1954 年発行で 1 ページ目は本学の数学教員にとって大先輩である武田楠雄先生の微分幾何に関する論文であった。(なお武田先生は 1967 年に 58 歳で逝去されたが、純粋数学の論文だけでなく明治維新前後の日本の科学史に関する著書が死後 5 年後に岩波新書として出版された。)それから 69 年後に最終号を迎えることになったが、その理由は投稿論文が少なくなってしまったことである。査読がないので論文として評価されず、研究報告も査読制度を導入しようとしても査読者が限定され匿名性が失われてしまうので断念せざるをえないだけでなく、二重投稿を禁止しているので研究報告で発表すると他の学術雑誌に投稿できなくなるのも原因だと思う。論文の質を担保するために査読は必要不可欠であるが、査読者の主観により掲載可否が決まってしまうのであれば、独創的過ぎて査読者に理解されず、研究ノートに埋もれたままになってしまうこともありうる。査読がない研究報告であればそのような論文が掲載される可能性もあり、本学の図書館に行かなくてもインターネットで誰でも閲覧できるので、研究報告がなくなっても査読者に理解されず掲載されないような論文も公表し、後世に評価される道を残すようにして欲しい。 (長谷川 研二)